ご挨拶

理事　仲村　尚司

この度沖縄県医師会理事を拝命した中頭病院救急科医長　仲村尚司と申します。

1985年に那覇で生まれ2010年に高知大学を卒業し主に中頭病院で総合内科→救急部と経験を積んできました。総合内科専門医/救急専門医/統括DMATの資格を有しています。基本的には急性期病院の勤務医として歩んできた医師人生の大きな転機となったのは新型コロナウイルスの到来でした。

2回目の緊急事態宣言中の2020年8月、現場でコロナ対応するも院外での活動が重要ではないか？という思いを強く持つようになり、所属の間山部長の理解もあり自発的に県庁内のコロナ本部に登庁し最初に配置されたのが当時はDMAT事務局の方々を中心に運営されていたクラスター班とよばれる病院・施設対応チームでした。活動の度に課題を感じ能動的に活動しつづけた結果、最終的には県立中部病院本村先生/幸喜先生、中部徳洲会友利先生とともに施設支援医療コーディネーターも拝命し、以後は県庁クラスター班の県職員・看護師とともに県全体のクラスター対応をしました。

コロナは弱者を狙い撃ちするように施設を襲い、ピーク時には1,810名が施設内療養となりました。施設内療養環境を整えることが、病院の医療提供維持に繋がり、ひいては社会全体を守ることにつながるとの思いから、繰り返し県医師会などで説明を行い、多くの方々に協力と支援をいただきました。

率直に言えば以前までは医師会に対して必要性や帰属意識をあまり感じていませんでした。しかしコロナ禍を通じて医師会の重要性を認識しました。

沖縄県の高齢化は加速しており、パンデミックで経験した医療逼迫は常態化することが予測されます。しかし現場の実感として、その備えは不十分です。加えて、2024年度からの働き方改革により、従来の労働集約的で献身的な医師の働き方に依存した医療体制の維持が困難となり、またこの危機に疲れ果てた医療従事者の離職も続き、看護師不足による病棟閉鎖が増加し、医療ひっ迫の臨界点は下がり続けています。数年前であれば乗り越えられた医療需要の増加でも、容易に医療危機を招く状況です。医師の職能集団として医師会が果たすべき役割は大きいと感じていました。

田名会長から理事就任についてお電話をいただいた際、管理職でもない若輩者の自分に務まるのかという躊躇はありました。しかし、前述した課題に対応するためには、ベテランから若手まで、開業医、勤務医、大学、民間、公立が一致団結して対応しなければならないという意識から、不安はありますが応諾させていただきました。

以下担当業務についての所信表明です

主：救急、感染症→救急現場では急速に逼迫度が高まっており、これはコロナの様な一過性の物だけではなく高齢化進展等からくる構造的なものです。救急医療提供体制を維持するため情報収集、課題分析、対応の相談と関係各所と協力して対応していきます。来たるべき新興感染症危機対応及び予防の推進も重要です

副：医療介護・連携/地域包括ケア推進、地域医療、ICT、組織強化、災害、勤務医関係

→急速に進展する高齢化社会で高まる医療需要に対応するためには医療介護連携、在宅医療推進など地域包括ケア推進は急務であり、ICTを活用した情報連携も重要です。また自分も気づけていなかった医師会の果たしている役割と必要性も若手の先生方にも積極的に周知し組織力強化に努めます。DMATの知見もいかし災害対応に努めます。

田名会長の目指す調整力と行動力を用いて一致団結し結果を残す医師会像に深く共鳴し、その実現のため若輩ではありますが所属する中部地区医師会の先生方をはじめ多くの会員の皆様と協力し誠心誠意取り組む次第です。宜しくお願いします。